

# グローバリゼーションと地域産業

## —陶磁器業における越境的活動と関係性の比較分析—

太田 有子 \*

### Regional Dynamics of Globalization: Comparative Analysis of the Porcelain Industry in Japan

Ariko Ota

#### Abstract

This paper analyzes the process of globalization through an analysis of the porcelain industry in Japan in the late 19th century. The study of porcelains illuminates the dynamics as well as impacts of globalization on regional industry and local communities. The study investigates how the relations of those who were engaged in the production and distribution of porcelains influenced the process of development of the porcelain industry along with the increase of transnational interactions in the late 19th century. This study compares two major sites of porcelain production to illustrate the regional differences in manufacturing and distributing porcelains, including the major agents, the sources of funding, and the activities themselves. Analysis showed that the pre-existing relations and practices shaped the ways of organizing resources for the development of the porcelain industry. While some producers and merchants gained public funding and institutional support for establishing factories with new machinery and export of products, others took a more independent path in the process of introducing new technology in production and developing trade networks. Comparative regional analysis illuminates regional variances of the relations of those who were engaged in the porcelain industry that formed variant paths of industrial development along with globalization.

\* 順天堂大学 国際教養学部 先任准教授、国際基督教大学 社会科学研究所 研究員

## I. 問題の所在

本稿は、グローバリゼーションに伴う地域産業の変化を改めて捉え直す試みである。グローバリゼーションに伴う地域産業の再編は、一般的には既存の生産工程・部門の統合や産地移転を伴う変化を意味するものとして理解されている。従来の研究では、あくまでも近年の現象としてグローバリゼーションを捉え、地域の産業活動に関する変化として、地域産業の生産体制の再編、具体的には国際的な生産体制への編入に伴う製造業の生産拠点の海外移転、既存の生産体制の縮小等として理解され、その影響の方向性も一方向的に捉えられることが多かったといえる。しかしながら、その様態は一様ではなく、既存の生産体制の継続や地域間の相互作用による変化が生じる場合もあり、グローバリゼーションの地域産業への影響は必ずしも海外技術の導入に伴う生産関係の序列化や一方向的な改編を意味するものではなく、多様な過程と様態があると考えられる。近年の研究においても既存の産業活動ならびにその活動をめぐる関係の変化については、地域間ならびに地域内でも異なる様態が生じているとする見解が示されている（高橋, 2006, pp.156-157）。特に長期的に越境的な活動を分析する際には、変化の内容や方向性も多方面に及ぶと考えられることから、その過程ならびに影響について精査する必要があるといえる。本稿では、こうした問題関心から、地域におけるグローバリゼーションの展開を検証するため、地域を拠点として発達した産業の越境的な活動とその関係性の分析を行う。

本稿では、「グローバリゼーション（globalization）」を越境的な活動とその活動に伴う関係性の形成と変容の過程と定義したうえで、特定の地域を拠点として発達した陶磁器業の越境的な活動とその主体の関係性を中心に分析を行う。陶磁器業は、生産・流通・消費活動の越境的な展開とともに発展した産業であり、長期的にグローバリゼーションの過程とその影響を検証しうる事例であるといえる。地域の産業活動が越境的に拡大する過程とその活動主体の関係性を分析の対象とすることで、多層的な視点から特定の地域におけるグローバリゼーションの展開の過程を検証することができると考えられる。特定の地域を拠点に活発化する越境的な産業活動とその活動主体の関係性を検証し、複数地域の比較分析を通じて、地域におけるグローバリゼーションの多様な展開の一端を示すことを試みる。

## II. グローバリゼーションと社会変動

グローバリゼーションをめぐる議論は人文・社会科学の学問分野を超えて学際的に

発展してきたが、近年、長期的な視野でグローバリゼーションを社会変動として捉える見解が共有されるなか、従来のグローバリゼーションに対する認識も新たな視点で捉え直す必要があるといえる。グローバリゼーションはどのように展開し、どのような変化をもたらすのかといった問い、つまりグローバリゼーションの経緯や影響を明らかにすることは、グローバリゼーションに対する認識や方法論をめぐる議論にも関わる重要な問いである。本節では、グローバリゼーションをめぐる主要な論点の中でも、アプローチに内在する認識をめぐる論点を述べたうえで、本稿における分析対象事例との関連について述べる。

## 1. グローバリゼーションをめぐる方法論的課題

グローバリゼーションに対する認識のあり方をめぐる議論は、広く社会科学分野において方法論的課題とも連動しつつ展開してきた。現代の社会現象として捉える視点と長期的な社会変動として捉える視点の双方を内包しつつ発展したが、グローバリゼーションを社会変動として捉える場合には、社会現象と捉える視点とは対照的に長期的な視点でその動態の分析を志向してきたといえる。1990年代以降、社会科学分野においてこれまで前提とされてきた国民国家の枠組みを再考する議論に呼応して、グローバリゼーションを長期的に分析する視座が共有されるなか、方法論をめぐる議論が展開し、その原因や経緯に関わる問いをはじめ、学際的な議論が継続して展開してきた。以下ではグローバリゼーションを社会変動として捉える姿勢を示した代表的な研究によって提示された論点にふれつつ、グローバリゼーションの分析アプローチについて論じる。

グローバリゼーションをめぐる議論のなかでも、その影響に関する議論の一環として、グローバリゼーションの展開とローカルな領域の相互作用に対する認識は広く共有されてきた。グローバリゼーションが必ずしも画一的な変化や同質化を促すものではなく、地域の実情に応じて多様に展開しているという認識が示されており、A. アパデュライ (Arjun Appadurai) は、グローバリゼーションを「ローカル化の過程 (localizing process)」として経時的に捉えるとともに、地域性 (locality) は、主体の実践によって生成することを論じた (Appadurai, 1990, 1996, p. 17, [1995] 2003)。R. ロバートソン (Roland Robertson) も諸活動が国境を越えて文化や慣習と融合しながら進展していく過程を「グローカリゼーション (glocalisation)」としている。「地域性」は、こうした活動を通じて特定の領域が生成される過程を通じて顕現する

としてその実態を分析する意義を論じた (Robertson, 1992=1997, [1994] 2003)。グローバル化の展開に応じて新たな領域が生成する過程への関心に基づき、多くの研究が行われているなか、分析方法をめぐって学問分野を超えて議論が続いている。

近年、歴史学・地域研究分野においても、グローバルな視点を伴う研究が志向されており、グローバルな文脈における個別事例の取り扱いをはじめ、分析方法をめぐる議論が活発化している。歴史学研究者の L. ハント (Lynn Hunt) は、グローバル化は、諸活動の交流を通じて地域がより広域的な関係に編入されていく歴史的な過程であり、相互に関連する関係が深化し、拡大していく過程として定義している。巨視的な視点に基づく分析アプローチに代わって、特定の地域から発生する越境的な交流活動とその活動を担う主体間の関係や交流活動の相互作用の分析を行うことでグローバル化を長期的にかつ多面的に捉える視点の重要性を論じている (Hunt, 2014, p. 54, pp. 64-71=2016, p. 56, pp. 69-76)。S. コンラート (Sebastian Conrad) も特定の事例や事例間の関係性の分析を通じてグローバルな動態の多様な展開を検証することの意義を論じ、さらにグローバルな動態に呼応しながらローカルな領域が生成する過程を分析することを提案している (Conrad, 2016, pp. 129-140=2021, pp. 129-140)。

かねてより社会学分野においてもグローバル化の経緯を長期的な視点で捉える必要性が認識されており、グローバル化を社会変動として捉える視座に基づく研究がなされてきた。グローバル化研究を先導してきた S. サッセン (Saskia Sassen) は、既存の分析枠組みを再構成させる必要性を指摘し、特定のローカルな空間の事例を通じてグローバル化の展開を分析することの意義を述べるとともに、国家の枠組みで捉えられていた事象を改めてグローバルな文脈で捉え直し、グローバルに展開する社会変動とローカルな事象との相互作用を視野に入れた分析アプローチを提示している (Sassen, 2001a, 2001b, p. 347=2008, p. 387, 2007)。さらにグローバル化の進展に伴う国家の役割の変化や制度の再編を指摘し、行政の経済・社会活動に対する関与をはじめ、越境的な活動と連動して進行する国家内の諸制度の再編成を連続的に捉える必要性や特定の地域を拠点として発生する越境的な活動とその活動主体の関係性を分析する意義を論じている (Sassen, 1999 = 2004, 2006, p. 13= 2011, pp. 30-31, 2007, 2019)。上述のサッセンの議論に呼応するかたちで、都市社会学・地域社会学分野では、グローバル化を既存の社会空

間を再編する過程として捉える視座を共有し、越境的な活動とその活動主体の関係性の生成を通じて、都市・地域・コミュニティといったローカルな領域が再構成されるといった認識や、その影響は必ずしも一律に波及するのではなく、事例によって異なる様相を呈している点も論じられてきた（町村, 2006a, p. 64, 2006b, pp. 48-50）。

上述のように、グローバリゼーションの過程とその影響に対する多様な見解は、方法論をめぐる議論と結びつきながら学問分野を横断するかたちで展開してきたといえる。特定の地域から発生した活動と活動主体の関係性の越境的な拡大を通じて、ローカルな領域の生成・再編の過程を分析することは、長期的かつ多層的にグローバリゼーションを捉えるうえで有用なアプローチであると考えられる。

## 2. グローバリゼーションと地域産業

グローバリゼーションの進展を長期的に捉える試みとして、グローバルな文脈に照らして地域の経済活動を分析する研究が生じている。社会科学分野では、近代化の一環として工業化の起点や過程はどのように位置づけられるかという問いとともに多くの研究がなされてきたが、多くの場合、工業化を分析する際の前提として国民国家を単位として経済活動を捉える視点が内在していたといえる。経済史・経営史分野において、特定の地域を拠点とする工業化の歴史的経緯と過程を分析対象とする研究が行われるなかで、日本の工業化における政府の役割を重視する見解や明治期以降を起点とする政府主導型の工業化という従来の評価に対して、長期的な視点で地域における既存の産業活動の活発化とともに資本環境を支える社会的関係に注目するアプローチが提示されてきた（Morris-Suzuki, 1996; Nakamura, 2015; 中村, 2010; Ravina, 1999; 斎藤, 2008; Tanimoto, 2019; 谷本, 1998, 2002）。さらに近年では、広域的な地域間交流への注目をはじめ、特定の地域や国家を拠点としつつ、その領域を超えて生じる経済活動の実態を分析する研究もなされている（Gordon, 2012=2013; 中村, 2016; 杉山・グローブ, 1999; 谷本, 2008）。グローバルに展開する活動に呼応して特定の地域を拠点に活発化した活動の実態をはじめ、既存の活動・関係性の変容の過程や他地域の活動への影響については、今後さらに分析事例を重ねていくことが期されており、特定の産業活動に注目し、地域や行政区画の領域を超えて展開する活動を分析することは、グローバリゼーションの動態の一端の析出を試みる方法として有用であると考えられる。

グローバリゼーションに伴う地域産業の変化に関して、一般的に製造業の場合には

生産拠点の移転を伴う製造部門の再編として理解されることが多かったといえる。しかしながら、各地域の産業活動の変化を長期的に捉えるとともに、複数の地域の比較分析を行った場合、産業活動を取り巻く環境によって越境的な活動のあり方やその影響は異なる状況にあったと考えられる。より具体的には、産業活動に従事する社会集団や行政の関与が、当該地域の越境的な産業活動の展開のあり方にも作用していたと考えられる。先行研究においても、グローバリゼーションの地域産業への影響として、既存の生産体制の再編を促す一方、その変化を一義的に経済活動の合理化として捉えるのではなく、行政の関与や地域の活動を通じて発達した関係性を視野に入れつつ、グローバリゼーションの展開は地域によって異なった様相を呈していることも指摘されている（町村, 2006a, p. 64; 高橋, 2006, pp. 156-157）。

本稿では、上述のグローバリゼーションをめぐる一連の問いならびに方法論的課題をふまえ、特定の地域を拠点として発展した産業において越境的な志向性を持つ活動がどのように進展し、既存の活動や関係性にどのような影響や変化をもたらしたかという点を中心に分析を行うことで、地域を拠点としてグローバリゼーションが展開する過程とその影響の一端を明らかにする。従来、国家の領域内の経済活動として捉えられてきた工業化の過程を改めて地域を拠点に展開する活動として捉え直し、特定の産業の越境的な活動内容をはじめ、産業活動に従事する人々・組織等の関係性がどのように越境的な活動の活発化に影響したかについて分析する。地域間の比較を通じて地域の特性を明らかにするとともに、グローバルな動態に呼応して特定の地域を拠点に展開する越境的活動およびその活動を担う主体の関係性について分析することで、グローバリゼーションとローカルな活動および関係性の相互作用について検証する。

### Ⅲ. 陶磁器業の越境的活動に関する地域比較分析

#### 1. 陶磁器業における越境的活動の展開

本稿では、陶磁器業が継続的に発展した地域を拠点に展開した越境的な活動とその活動主体の関係性の分析を行い、長期的かつ多層的な視点からグローバリゼーションの過程とその影響について検証する。陶磁器業は、世界諸地域の生産・流通・消費活動の越境的な展開とともに発展した産業であり、長期的にグローバリゼーションの過程とその影響を検証しうる事例であるといえる。陶磁器の生産技術は、中国・朝鮮半島より日本へ伝播するかたちで生産を開始し、特定の地域において生産された陶磁器製品は、欧州・北米・アジア地域をはじめ世界諸地域に流通し、他地域における陶磁



器の生産技術にも影響を与えてきた。陶磁器業が発展した地域のなかでも、広域的な越境的活動を通じて発展した地域において、海外市場対象の製品の生産・流通の拡大に伴い、どのような関係性が生じ、既存の生産・流通活動や関係性がどのように変容したかについて分析する。

近代以降の行政機構の再編に伴う産業活動に関する諸制度の改変と政府の積極的な輸出政策は、陶磁器の生産・流通活動にも影響を与えたとされている。既存の陶磁器業の生産・流通活動の再編とともに、陶磁器業が持続的に発展した地域がある一方で、衰退した地域も多く存在した。陶磁器業の越境的な活動の拡大の経緯や既存の陶磁器業の生産・流通活動の変化に関して、地域の相違点をはじめ、さらにその地域特性の要因については、分析の対象となっていない。近世の徳川体制下の陶磁器業は、行政の関与の程度や陶磁器業従事者の関係が地域によって異なっており、行政と社会集団の関係が各地域の生産・流通活動の資源の管理・利用のあり方に影響していたことが示されている（太田，2014）。近代以降、行政の関与や陶磁器従業者の関係性は、地域の生産・流通活動をはじめ、越境的な産業活動の展開にも少なからず影響していたと考えられるものの、既存の活動や関係性が越境的な活動の展開にどのように作用したかについては、従来の研究では必ずしも分析の対象とはなっていない。

上述の状況をふまえ、近代化の単線的な経路として工業化を捉える視点や国家の領域内の活動として捉える視点を相対化し、特定の地域を拠点として発展した陶磁器業の越境的な活動を通じてグローバリゼーションの展開の過程を検証する。陶磁器業の越境的な活動が展開する過程において、既存の生産・流通活動がどのような変化を経験し、また新規の活動はどのような主体が担うことになったか、特定の地域を拠点として拡大する越境的な産業活動とその活動主体の関係性を分析する。次項以下では、陶磁器業が持続的に発展した地域として有田地域、名古屋・瀬戸地域における陶磁器業の生産・流通の越境的な活動主体と関係性の変化を中心に分析する。有田地域、名古屋・瀬戸地域は、いずれも近代以前より陶磁器業が発達し、特に海外市場への積極的な販路拡大をはじめ越境的な活動の拡大を通じて発展した地域であることから、長期的に展開するグローバリゼーションの過程とその影響について検証するうえで重要な事例であるといえる。陶磁器業の工業化が進展し、海外を対象とした生産・流通活動が活発化する過程において、当該地域では、どのような主体が生産技術の導入や海外市場への販路拡大に積極的に関与したのか、生産・流通活動を担う主体の間でどのような関係性が生じたのか、既存の活動や関係性はどのように関わっていたかといっ

た点を中心に、地域間の比較分析を行い、各地域における越境的な活動の展開を検証する。

## 2. 陶磁器業の越境的活動と行政支援—有田地域

有田地域における陶磁器業は、越境的に拡大する経済活動の進展に伴う海外市場の需要の増大と国内市場の成長に伴って発展した。旧体制下においては、陶磁器業の生産流通活動全般が行政の管理・統制の対象となっていたが、19世紀後期以降、既存の生産・流通に関する諸制度・規制等が撤廃し、陶磁器業の生産・卸売業者の分業を制度化していた鑑札制度の廃止に伴い、新規事業者の参入が可能となり、卸売業者・絵付業者をはじめ、旧士族・商農業従事者等、様々な社会層が商品開発や資金調達を通じて、陶磁器業に関与するようになった。多様な社会層が陶磁器の生産・流通活動に参入する一方で、行政による海外市場対象の陶磁器製品の生産・流通活動に対する関与や支援も行われた。旧体制下で佐賀藩は海外市場への輸出を奨励したが、新体制下において政府の輸出奨励政策の一環として、陶磁器は主要輸出産業品目として扱われ、生産・流通に関する諸活動を対象とした財政的・制度的支援が行われた。

政府や地方自治体による有田地域の陶磁器業に対する直接的な関与として、技術導入の際の財政支援が挙げられる。政府の財政・制度的支援による陶磁器生産における新技術の導入は、生産体制の刷新を促し、大型機械・製陶機の購入、工場設立など大規模な設備投資が進展した。欧州出身の技術者が招聘され、釉薬・絵付技術等における技術指導も行われ、海外市場対象の洋食器・装飾品等の製品を生産する事業者が増えた。さらに有田出身の生産者は、政府の支援を受けて研修生として欧州地域に派遣され、製陶工場等の視察を行い、生産技術の導入と技能習得を目指した。地方自治体より支援を受けて市場の調査を目的とした中国への視察訪問の機会もあった。流通面においても政府が輸出振興策の一環として各産業の特産品の販売促進を行い、有田地域の生産者が万国博覧会へ陶磁器を出品する際の支援をはじめ、有田地域にて陶磁器の販売会社・製造会社を設立する際にも財政支援を行った。万国博覧会の事務局には佐賀県出身者が在籍しており、徳川体制下において有田地域の陶磁器業を監督し、原料の統制や製品の生産管理を行っていた佐賀藩の陶業監察官が、新体制下では海外市場への輸出振興策の一環として陶磁器業の支援を行い、博覧会開催時には事務官として有田地域で生産された陶磁器の出品に対応した（有田町, 1988; 宮地, 2008; 山田, 1995, 1996, 2008）。有田地域で生産された磁器製品は海外に広く流通していたが、



海外への流通活動の拡大に対応して、販売対象地域の生活様式に応じた多様な陶磁器が生産されるようになった。欧州地域を対象として洋食器・装飾品等の陶磁器製品が生産され、アジア地域対象としては一般食器、磁器製の碁子等が取り扱われるようになった（有田町、1988）。

有田地域の陶磁器生産・販売において、特に行政による財政・制度的支援を受けながら発展した代表的な事例として、起立工商会社や香蘭社が挙げられる。起立工商会社は、有田地域の卸売業者が中心となって海外市場における陶磁器をはじめ工芸品の委託販売を目的として設立された。同社の関係者は、博覧会の事務局関係者が仲介するかたちで政府より財政支援を受けて、万国博覧会への出品取扱いを担当するとともに陶磁器の海外市場における流通ネットワークを開拓した。香蘭社は、政府関係者から要請を受けて、海外市場対象の陶磁器製品の製造・販売会社として 1875 年に深川氏をはじめ複数の生産者・卸売業者の共同出資によって設立された。創設者の深川氏は有田地域の窯元として磁器生産を行っており、旧体制下では佐賀藩の陶磁器の生産・流通制度にも関与しており、19 世紀後期以降、陶磁器の輸出に積極的に関与することとなり、欧州における万国博覧会では販売を担当した。海外販売事業の拡大に向けて独自の販売体制の構築を目指し、長崎・横浜・神戸に販売拠点として支店を設置し、東京支店開設の際に旧佐賀藩鍋島本邸の敷地の一部借受けるなど、政府による支援を得て事業規模を拡大していった。また、独自の流通ネットワークを開拓する一方、前述の起立工商会社に販売を委託するなど既存の関係も活用した（有田町、1985；山田、1996、2008）。上述の事例は、いずれも旧佐賀藩・有田地域出身者による地縁を介して政府の協力・支援を受けて陶磁器の越境的な流通活動の拡大を試みた事例といえる。

有田地域は、従来より陶磁器生産の拠点であり、長崎を経由した交易活動や他地域への流通活動等、越境的活動を通じて継続的に発展してきたが、近代以降、諸制度の撤廃とともに地域の既存の生産活動の再編が生じた。従来、徳川体制下における有田地域の生産・流通業者は、行政による公的認定・制度的支援を受けながら生産・流通活動を拡大した経緯があり、新体制下では、地域の有力な生産・卸売業者は、既存の関係を継承しつつ、行政と連携・協力関係を取り結びながら既存の活動範囲・対象を超えて活動を拡大していった。陶磁器業従事者が海外市場を対象とした越境的な流通活動を展開する際には、政府の支援を受けながら、生産面では大型機械の導入、工場設置等の設備投資、技術者の招聘・生産者の海外派遣等による海外からの技術導入を

行った。陶磁器の生産拠点である有田地域は、流通面においても鉄道の敷設により集荷拠点となり、万国博覧会への出展、政府融資による会社設立等を通じて、生産・流通体制の拡充をはかっていった。有田地域の陶磁器業は、行政による関与や財政・制度的支援を受けながら越境的な活動を拡充したといえる。

### 3. 陶磁器業の越境的活動と民間資本—名古屋・瀬戸地域

瀬戸地域は歴史的に陶磁器生産が発達した地域であり、19世紀初頭の磁器生産開始以降、従来の陶器生産とともに磁器の生産が発展した。名古屋地域は、かねてより瀬戸地域ならびに近隣地域で生産された陶磁器の集散地として製品の集荷・発送の拠点であり、また名古屋地域の卸売業者が瀬戸地域の生産者に対して、原料・資金を調達して製造を委託するかたちで陶磁器の生産に関与する事例も多く見られた。徳川体制下では、陶磁器業の同業者組合が発達し、生産・流通に関する自主規制を行っていたが、19世紀後期（明治期）以降、同業者組合が廃止され、陶磁器の生産・流通に対する従来の規制が緩和されたことで、名古屋・瀬戸地域では様々な社会層が陶磁器の生産・流通に関わるようになった。

近代以降、名古屋・瀬戸地域における陶磁器業の生産活動は、同業者による自主規制の撤廃に伴い、多様な社会層が陶磁器業に参入する過程で、生産者による資本調達の活発化と民間資本による設備投資が進展し、生産規模が拡大していった。明治期以降、名古屋地域は、商業資本を背景に卸売・流通拠点に加えて陶磁器の生産拠点になっていった。海外市場対象の製品の需要の増加に伴い、名古屋地域では中小規模の絵付作業所が多く設立されたことで絵付加工業が発達し、さらには陶磁器製品の増産に向けて、全工程に関わる陶磁器の製造所、中・大規模の近代的な生産設備を持つ陶磁器製造工場が設置され、会社組織も設立された（大森, 1995）。

瀬戸地域では、旧体制下において19世紀前期には様々な社会層が陶磁器業に参入したことで、既存の卸売業者と生産者の関係に基づく生産・流通活動の変化が生じていた。従来、生産者は同業者組合の活動を通じて自主的な規制を行っており、卸売業者は生産者へ資金・原料の提供とともに陶磁器生産の工程の一部を委託することで生産に関与していた。一方、卸売業者が生産に関わる原料や資金を調達し、陶磁器の生産に直接的に関与する事例や、生産者がより主体的に資金調達を行うケース、農業従事者による陶磁器業への参入も見られた。（瀬戸市, 2006）。

近代以降、より自由な生産活動が可能な環境となったことで、生産者が資本調達を

行い、生産工程の一部に機械や新技術を導入し、生産規模を拡大する事例も見られた。多様な主体による自律的な生産活動が活発化する一方で、改めて地域内で同業者組合を組織し、同業者間で生産に関する利害と課題を共有し、協働しつつ解決策を探る方向も見られた。瀬戸地域内で調達していた原料の陶土の採掘量が急増し、資源の枯渇化を懸念した生産者は、同業者組合を通じて原料の陶土の採掘・分配等の資源管理を自主的に行った。技術導入・開発においても、陶磁器の研究開発を行う陶器試験所に対して陶磁器商工組合同業者組合が石炭窯の開発を委託するなど、組合活動を通じて同業者間で共有した（瀬戸市, 2006; 大森, 1995, 2015; 宮地, 2008）。

明治期以降、名古屋・瀬戸地域を拠点として海外市場対象の磁器生産の活発化に伴い、特に洋食器・装飾用磁器の生産高が急速に増加し、輸出高が増加した。名古屋地域は海外市場対象の陶磁器製品の主要集散地となったが、陶磁器を扱う貿易商が中心の組合が組織され、海外との商取引における懸案事項を共有し、より円滑に活動を行うための環境整備を目指す活動が生じた（大森, 2015）。陶磁器製品の海外市場における販売に際して、海外に独自の販売拠点を設置する卸売業者もあり、海外市場対象の製品の生産の活発化とともに米国・アジア市場に積極的に販路を拡大する動きが見られた。代表例として、森村商事は貿易商として設立した 1876 年に米国の販売拠点として支店を開設し、1880 年代には陶磁器の取り扱いを契機に生産過程にも参入した。瀬戸の製造業者との専属契約を行うかたちで製造を委託し、名古屋に絵付工場を設立した。また、米国支店からの消費者の動向に関する情報を参考に、米国市場対象の日用洋食器の商品開発を行った。一方で、海外の市場動向等の情報提供に関する政府からの協力要請には応じることなく、自律的に越境的活動を展開していった（本宮, 1997）。民間による資本を中心に、小売業から卸売業、さらには製造業へと事業形態・規模を拡大し、名古屋市中心部に大規模工場を設置して洋食器をはじめ陶磁器製品の大量生産体制を構築した（鈴木, 1998; 宮地, 2008）。

名古屋・瀬戸地域における陶磁器の生産・卸売業者は、従来の業態を超えて生産・流通活動を拡大しながら越境的活動を展開していった。名古屋地域と瀬戸地域では、陶磁器生産の発展の歴史的経緯をはじめ、生産体制・規模・技術導入に関する地域間の相違点も見られた。名古屋地域においては、大規模工場から中小規模の作業所まで多様な生産体制が並存し、海外の技術・設備の導入の時期や内容も生産者の生産規模に応じて異なっており、近代的な生産設備を持つ工場が設立される一方で、卸売業からの委託契約に基づいて既存の生産体制を維持しながら生産を行う生産者も多かつ

た。瀬戸地域では、従来の生産者による生産体制を継続している事例が多く、技術導入の規模においても既存の生産工程の一部に石炭窯、電力轆轤等の機械・設備を導入するなど、局所的な導入を特徴としていた。一生産者あたりの生産規模も小規模で、保有資金や融資の制約上、生産面での機械・設備導入については、その効果を十分に検討し、組合活動を通じて情報を共有しながら段階的に行っていた。

名古屋・瀬戸地域における陶磁器業は、生産者・卸売・販売業者が自律的に生産・流通を拡大しながら越境的活動を展開していったことが特徴として挙げられる。名古屋・瀬戸地域では生産面における設備投資や技術導入に際しては、民間資本を中心に資本調達を行い、海外の技術を導入する際にも生産者が設備投資の効果を事前に検討しつつ、既存の生産体制・生産技術との接合を行うなど、限定的に行っていた。従来、名古屋・瀬戸地域は、組合活動が活発であり、自主的な活動規制を行いながら、地域の陶磁器業が発展した歴史的経緯があった。19世紀後期には、同業者組合は一旦解散したものの、原料の管理や商取引等の課題を受けて、再度、生産者や貿易業者の組織化が進み、生産者と販売業者の合同の同業者組合の活動が活発化し、原料の資源管理や技術開発・導入に関する情報共有等、当該地域の持続的な生産・流通活動のための協力体制を形成するに至った。新体制下における諸制度の改編を通じて、より多様な主体が陶磁器業に参入し、自律的に生産・流通活動を行いながら活動を維持・拡大するための環境を共同で整備する動きも見られた。海外を対象とした製品の生産・流通活動の拡大に伴い、名古屋地域は新規の生産者による事業拡大を通じて陶磁器生産・流通の拠点となり、瀬戸地域も既存の生産体制の段階的な再編が生じた。名古屋・瀬戸地域では、既存の活動・資源も活用しつつ、陶磁器の生産・流通活動の再編を通じて越境的活動を展開していった。

#### 4. 陶磁器業の地域間比較―越境的活動の多様な展開

本節では、陶磁器業の発展した有田地域ならびに名古屋・瀬戸地域における陶磁器業の生産・流通活動とその活動主体をめぐる関係性を中心に分析を行った。有田地域と瀬戸・名古屋地域を比較すると、特に明治期以降、政府・地方自治体が陶磁器の輸出振興政策として陶磁器業に対して行った制度・財政面の支援の地域差が顕著であったといえる。有田地域では、旧体制下において行政の生産・流通への管理統制が行われており、近代以降、諸制度の撤廃がなされた一方で、政府や地方自治体が陶磁器の生産・流通に積極的に関与し、行政の財政・制度的支援を受けながら陶磁器業の生産

面における技術導入・設備投資や海外市場を対象とした陶磁器製品の販売促進を行う事例が多く見られた。一方、名古屋・瀬戸地域においては、19世紀後半以降、同業者組合による規制の撤廃によって自由な生産・流通活動が可能になり、卸売業者が製造業に直接参入し、製造所を開設する事例など、より多様な社会層が生産活動に関わるようになった。有田地域とは対照的に、名古屋・瀬戸地域の地方行政による支援は限定的で、民間資本による陶磁器の生産への設備投資・技術導入が中心であった。従来の卸売業者から生産者に対する資金提供に加えて、生産者の自主的な資金調達による設備投資が行われた。資金面の制約から、既存の生産体制・工程の一部に設備・機械を導入するなど、費用・生産効率等の効果を検証しつつ、段階的かつ局所的な技術導入を特徴としていた。陶磁器の卸売・販売業者が独自に海外の消費動向等の情報収集を行い、商品開発を進める事例や、同業者組合が共同で研究開発を委託し、その成果を共有する事例も見られた。流通面においても民間資本による貿易会社が設立され、米国をはじめ海外市場対象の製品を多く取り扱っていたが、行政の支援や関与は伴わないかたちで自律的に活動を拡大した。当該地域の比較分析を通じて、各地域の地域特性と陶磁器の生産流通活動が越境的に拡大する過程における地域間の相違点が明らかになった。

有田地域、名古屋・瀬戸地域は、いずれも海外市場への販路拡大を通じて持続的に発展した地域であるが、陶磁器の生産・流通活動の発展の経緯、越境的活動の展開のあり方は各地域における活動主体とその関係性によって異なっていたといえる。特に行政による関与のあり方、陶磁器業を対象とした制度・財政面の支援における地域差が見られた。地域間の相違点が生じる背景として、徳川体制下における生産・流通制度は撤廃されたものの、明治期以降も、地域によっては既存の関係性や慣行の一部が形態を変容しつつ継続し、政府の財政・制度的支援や資本環境に影響を与えていたことが挙げられる。当該地域における既存の陶磁器の生産者・卸売業者の関係をはじめ、政府および地方自治体による産業政策・財政支援といった直接的な関与は、資本調達・設備投資・市場開拓のあり方をはじめ、陶磁器の生産・流通活動の環境に影響を与えたと考えられる。陶磁器産業の越境的な活動は、地域の陶磁器業の再編を促したが、行政の関与や同業者間の関係性によって多様に展開したといえる。

陶磁器の流通の広域的な拡大は、生産技術の伝播・共有といった技術・文化面における双方向的な交流に発展した。有田地域の生産者は欧州地域より技術導入を行う一方で、有田で生産された磁器製品は、欧州地域をはじめ海外の磁器生産に影響し、有



田地域で生産された磁器製品の絵付技術の伝承や意匠・素地の模倣等も生じた。名古屋・瀬戸地域において生産された陶磁器製品も、海外の市場動向に対応して欧米地域の生産技術の影響を受ける一方で、海外で生産される陶磁器製品において意匠・絵付・装飾等の技術の伝承が見られた。さらに越境的な活動の活発化は地域に紐づいた製品名の普及にもつながった。有田で生産された陶磁器は、出荷拠点である伊万里港に由来して「伊万里焼 (Imari)」として国内外に流通していたが、近代以降、鉄道の敷設により、有田地域が新たに製品の集散地となったことから「有田焼 (Arita)」として扱われるようになった (有田町, 1998)。また日本陶器の生産拠点であった名古屋市内の則武町に由来する「ノリタケ (Noritake)」が製品名として海外でも普及するようになった (ノリタケ, 2005)。越境的な活動の拡大に伴い産地が製品名として広く普及することは、特定地域が陶磁器の主要な産地として認識される過程であると同時に、地域の活動主体にとっては陶磁器産地としての意義を改めて確認する過程でもあったといえる。陶磁器の生産に関する技術の伝播や製品の流通を通じて、グローバリゼーションの影響の方向性は必ずしも一方向ではなく、越境的な活動を通じてその影響や方向は多様に展開していたといえる。

本研究が分析対象とした地域の越境的な活動が活発化する過程は、既存の活動の再編と変容の過程でもあったといえる。グローバルな経済活動への編入が進展する過程において、陶磁器業の既存の活動と関係性が変容し、新規の活動主体の参入や行政による支援など、新たな関係性から生じる活動も示され、比較分析を通じて地域の事情を反映した越境的活動の多様な展開が明らかになった。当該地域はいずれも陶磁器業が持続的に発展した地域であったが、陶磁器の生産者・卸売・販売業者の活動に対して行政による積極的な関与や支援が行われた事例がある一方で、既存の活動・関係性に基づく資源を利用しつつ新規事業を開拓する事例もあり、多様な主体が陶磁器の生産・流通活動に関与していた。越境的な活動と活動主体の関係性の比較分析を通じて、既存の活動の再編とともに新たな生産・流通活動を通じて陶磁器業の拠点として地域の領域を改めて再編成する過程が明らかになったといえる。

#### IV. 結論

本研究では、グローバリゼーションに対する認識ならびに方法論をめぐる議論に対して、長期的な社会変動としてグローバリゼーションを捉え、特定地域を拠点として発展した有田地域、名古屋・瀬戸地域における陶磁器業の越境的活動と活動主体の関



係性の比較分析を行った。陶磁器業の生産体制の変化・工業化の過程や流通活動の発展において、陶磁器業に関わる主体とその関係性における地域間の多様な様態が明らかになった。行政による積極的関与を伴う財政支援によって生産・流通活動が発展する事例がある一方で、民間の資本調達による限定的な技術導入が持続的な発展に結びつき、海外市場の開拓においても自律的に販路を拡大する事例もあった。新規の事業者による活動が活発化する一方で、事業者が既存の資源や関係を活用しながら生産・流通活動を拡充した事例も見られた。

当該地域においては、いずれも海外市場対象の陶磁器生産が増加し、多くの製品が海外に流通したが、地域の独自の関係性が越境的活動の展開のあり方に作用していたといえる。有田地域では、行政による財政・制度的支援による設備投資・技術導入を伴う工業化が進展したのに対して、名古屋・瀬戸地域では、行政による直接的な関与や支援は限定的であり、民間資本による技術導入を伴う生産体制の変化とともに同業者組合による生産・流通に関する諸資源の共有を通じた活動の活発化が見られた。複数の地域の比較分析を通じて、陶磁器の生産・流通業者間の関係や行政の関与が、地域における生産・流通活動の環境に作用し、当該地域の陶磁器業の生産・流通活動の進展に影響していたことが示された。

グローバリゼーションに伴い、地域の産業は、既存の生産工程・部門の統合や産地移転などの変化を経験するものとして理解されているが、分析対象事例において、その過程や内容は一律ではなかったといえる。地域によって、生産・流通活動従事者の関係性や行政の関与は異なる様相を示しており、越境的な活動のあり方にも影響していた。グローバリゼーションは、必ずしも既存の生産関係を序列化し、一方的な改編を行うものではなく、陶磁器業の当該地域の事例においては地域の既存の活動や関係性を反映しながら新規の活動が活発化するなかで地域の産業活動の再編が生じていた。さらに越境的活動を通じて生産技術の移入が生じる一方で、製品の広範な流通を通じて、当該地域で発達した生産技術や意匠が海外の陶磁器生産に影響し、広域的な地域間交流も生じた。陶磁器業の越境的活動と関係性の分析を通じて、グローバリゼーションの多様な展開が明らかになった。

本研究を通じて、地域を拠点として活発化した越境的活動は、地域の活動や関係性に応じて展開していたことが明らかになり、長期的な視点で地域の活動や活動主体の関係性の動態を捉える重要性を示すとともに、複数の事例の比較分析を通じて地域特性を示した。グローバリゼーションは必ずしも社会の均質化や一律的な変化をもたら

すものではなく、地域の既存の活動・関係性をはじめ、当該地域の環境に応じて進行していたことや、特定の地域の活動が広域的な交流に波及していったことは、地域におけるグローバリゼーションの実態を理解するうえでも重要であり、地域間の比較分析を行うことは、地域特性の原因を特定化するうえで方法論上の意義があると考えられる。長期的かつ多層的な視点で特定の地域の活動や関係性を通じてグローバリゼーションを捉える姿勢とともに様々な事例の分析を重ねることで、今後さらに研究の地平が開かれることを期して結びとする。

【付記】本論文は、日本学術振興会 科学研究費・基盤研究（C）課題番号20K02168の研究成果の一部である。

## 参考文献

- Appadurai, A. (1990). Disjuncture and difference in the global cultural economy. *Theory, Culture, and Society*, 7 (2-3), 295-310.
- Appadurai, A. (1995). The production of locality. In R. Pardon (Ed.), *Counterworks: Managing the diversity of knowledge* (pp. 204-215). Routledge. Reprinted in: R. Robertson & K. E. White (Eds.), (2003). *Globalization: Critical concepts in sociology* (pp. 52-73). Routledge.
- Appadurai, A. (1996). *Modernity at large: Cultural dimensions of globalization*. University of Minnesota Press.
- Conrad, S. (2016). *What is global history?* Princeton University Press. ((2021) 『グローバル・ヒストリー—批判的歴史叙述のために』 小田原琳 (訳), 岩波書店.)
- Gordon, A. (2012). *Fabricating consumers: The sewing machine in modern Japan*. University of California Press. ((2013) 『ミシンと日本の近代』 大島かおり (訳), みすず書房.)
- Hunt, L. (2014). *Writing history in the global era*. Norton. ((2016) 『グローバル時代の歴史学』 長谷川貴彦 (訳), 岩波書店.)
- Morris-Suzuki, T. (1996). *Technological transformation of Japan*. Cambridge University Press.
- Nakamura, N. (2015). Reconsidering the Japanese industrial revolution: Local entrepreneurs in the cotton textile industry during the Meiji era. *Social Science Japan Journal*, 18 (1), 23-44.
- Ravina, M. (1999). *Land and lordships in early modern Japan*. Stanford University Press.
- Robertson, R. (1992). *Globalization: Social theory and global culture*. Sage. ((1997) 『グローバリゼーション 地球文化の社会理論』 阿部美哉 (訳), 東京大学出版会.)
- Robertson, R. (1994). Globalisation or glocalization. *The Journal of International Communication* 1 (1), 33-52. Reprinted in: R. Robertson & K. E. White (Eds.), (2003). *Globalization: Critical concepts*

- in sociology* (pp. 31-51). Routledge.
- Sassen, S. (1999). *Losing Control?: Sovereignty in an age of globalization*. Columbia University Press.
- ((2004)『グローバリゼーションの時代—国家主権のゆくえ』伊豫谷登士翁(訳), 平凡社.)
- Sassen, S. (2001a). Spatialities and temporalities of the global: Elements for a theorization. In A. Appadurai. (Ed.), *Globalization* (pp. 260-278). Duke University Press.
- Sassen, S. (2001b). *The global city. New York, London, Tokyo*. Princeton University Press. ((2008)『グローバル・シティー—ニューヨーク・ロンドン・東京から世界を読む』伊豫谷登士翁(監訳), 筑摩書房.)
- Sassen, S. (2006). *Territory · authority · rights: From medieval to global assemblages*. Princeton University Press. ((2011)『領土・権威・諸権利—グローバリゼーション・スタディーズの現在』伊豫谷登士翁(監訳), 伊藤茂(訳), 明石書店.)
- Sassen, S. (2007). The places and spaces of the global: An expanded analytical terrain. In D. Held & A. McGrew (Eds.), *Globalization theory: Approaches and controversies* (pp. 79-105). Polity Press.
- Sassen, S. (2019). Researching the localizations of the global. In M. Juergensmeyer, S. Sassen, M. B. Steger, & V. Faessel (Eds.), *The Oxford handbook of global studies* (pp. 73-92). Oxford University Press.
- Tanimoto, M. (2019). From 'feudal' lords to local notables: The role of regional society in public goods provision from early modern to modern Japan. In M. Tanimoto & R. B. Wong (Eds.), *Public goods provision in the early modern economy: Comparative perspectives from Japan, China, and Europe* (pp.17-37). University of California Press.
- 有田町史編纂委員会(1985)『有田町史 陶業編 II』.
- 有田町史編纂委員会(1988)『有田町史 商業編 II』.
- 太田有子(2014)「資源ガバナンスの比較地域分析—陶磁器の生産流通制度をめぐる関係性の形成と変容」『社会学評論』257, 16-31.
- 大森一宏(1995)「明治後期における陶磁器業の発展と同業組合活動」『経営史学』30(2), 1-30.
- 大森一宏(2015)『近現代日本の地場産業と組織化—輸出陶磁器業の事例を中心として』日本経済評論社.
- 斎藤修(2008)『比較経済発展論』岩波書店.
- 杉山伸也・グローブ, リンダ(1999)『近代アジアの流通ネットワーク』創文社.
- 鈴木良隆(1998)「模倣と着想—J. ウェッジウッド, 森村市座衛門, もう一つの産業化—」榎山紘一(編)『岩波講座 世界歴史 22 産業と革新』(pp. 87-107), 岩波書店.
- 瀬戸市史編纂委員会(2006)『瀬戸市史 資料編 5』.
- 高橋英博(2006)「グローバリゼーションと日本の地場産業」古城利明(監修)新原道信・広田康生(編)『地域社会学講座・第2巻・グローバリゼーション/ポスト・モダンと地域社会』(pp.143-159), 東信堂.
- 谷本雅之(1998)『日本における在来的経済発展と織物業—市場形成と家族経営』名古屋大学出版会.
- 谷本雅之(2002)「在来的発展の制度的基盤」社会経済史学会(編)『社会経済史学の課題と展望』(pp. 278-290), 有斐閣.
- 谷本雅之(2008)「日本綿業とグローバル・ヒストリー」水島司(編)『グローバル・ヒストリーの挑戦』(pp. 126-140), 山川出版社.

- 中村尚史 (2010) 『地方からの産業革命』 名古屋大学出版会.
- 中村尚史 (2016) 『海を渡る機関車—近代日本の鉄道発展とグローバル化』 吉川弘文館.
- ノリタケ 100 年史編纂委員会 (2005) 『ノリタケ 100 年史』 ノリタケカンパニーリミテッド.
- 町村敬志 (2006a) 「グローバリゼーションと地域社会」 似田貝香門 (監修) 町村敬志他 (編) 『地域社会学講座・第 1 巻・地域社会学の視座と方法』 (pp. 46-66), 東信堂.
- 町村敬志 (2006b) 「グローバリゼーションと都市空間の再編」 似田貝香門・矢澤澄子・吉原直樹 (編) 『越境する都市とガバナンス』 (pp.35-58), 法政大学出版局.
- 宮地英敏 (2008) 『近代日本の陶磁器業』 名古屋大学出版会.
- 本宮一男 (1997) 「海外情報と陶磁器輸出」 高村直助 (編) 『明治の産業発展と社会資本』 (pp. 341-364), ミネルヴァ書房.
- 山田雄久 (1995) 「明治前期陶磁器産地における機械導入—肥前国有田町精磁会社の海外直輸出—」 『大阪大学経済学』 45 (1), 33-47.
- 山田雄久 (1996) 「明治前期における肥前陶磁器業の輸出戦略」 『経営史学』 30 (4), 32-58.
- 山田雄久 (2008) 『香蘭社 130 年史』 香蘭社.